



Data

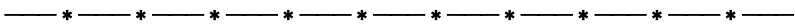
監督・脚本：片瀨須直
 原作：この史代『この世界の片隅に』（双葉社刊）
 声の出演：のん／細谷佳正／小野大輔／尾身美詞／稲葉菜月／潘めぐみ／岩井七世／牛山茂／新谷真弓／小山剛志／津田真澄／大森夏向／佐々木望／塩田朋子／たちばなことね／瀬田ひろ美／世弥きくよ／京田尚子

👁️👁️ みどころ

アニメがあまり好きでない私も、ずくの日常生活を丁寧に描いた映像の美しさと優しさに納得！夫の顔も知らないまま嫁いだ18歳のずくだったが、お偉方が勝手に始めた「あの戦争」によって、その日常生活には物資不足と空襲警報の苦しみが・・・。

広島弁丸出しの、のんのセリフは心地良く、時々見せる「非日常」の描写もなるほど、なるほど・・・。しかし、原爆投下の広島は？呉市は？

それでも生きていく！タイトルの意味を噛みしめながら、ヒロインのそんな心の叫びをしっかり受け止めたい。



■□■予想外の満席、満席にビックリ！■□■

私は11月22～23日の国内映画ランキングで累計興行収入189億円を突破し、現在もなお大ヒット中の東宝配給の『君の名は。』（16年）を観ていない。その理由は、もともとアニメがあまり好きではないこともあるが、それ以上にこれほど大ヒットしても同作がホントにいい映画なのか、それともいかにも日本（人）的なブームに乗っかっているためなのかの判断がつかないためだ。それと同じように、『この世界の片隅に』も何度か予告編を観て、時間があれば観ておいてもいいなと思う程度の作品だった。

そんな気持ちで11月23日の祝日に同作を含めて3本鑑賞しようと映画館に行ったが、目的の朝一番の回は満席。立ち見でも無理だった。しかし、次回が数席だけ空いていたので時間をずらしてその回で鑑賞することに。おかげでこの日は合計3本観る予定が2本に減ったが、まあ見逃したのはどうでもいい映画だっただけに、そんな状況下で本作を鑑賞

できたことに感謝！しかし『キネマ旬報』12月上旬号でも3人の評論家がすべて星5つをつけて絶賛している本作の出来は・・・？

■□■アニメ映像の進歩と技術をどう理解？■□■

本作のパンフレットは1000円と高いが、大判でページ数も多く内容も豊富だから読み応えがある。その中にある、本作を監督・脚本した片淵須直のインタビューでは、アニメ映像の描き方や撮影、編集、動かし方等についての詳細な説明がされている。これを読んでその専門的なことがわかる人がどれほどいるのか知らないが、たしかにスクリーン上に登場してくるアニメ映像は柔らかいものや力強いものなどを含め、全体的にホンノリとした感じが強い。しかも面白いのは、冒頭から絵を描くのが大好きな少女時代の浦野すず（声・のん）が描いたスケッチを次々と見せながら、それを現実の風景とダブらせていく手法。広島弁丸出し（当然だが、これはかなり難しいはず）で、いかにもぼんやりした少女・すずがなぜこんなにしっかりした絵を描けるのが不思議だが、本作が大ヒットしている理由はまちがいなくすずが描くたくさんの絵の美しさとスクリーン上に見るアニメ映像の美しさにありそうだ。

しかもパンフレットを読むと、時代考証のため本作の企画から完成まで6年間もかけて1枚1枚の絵を丁寧に描いたそうだ。それはまた、パンフレットにある「ロケ地マップ」の絵を見ればよくわかる。広島市の原爆ドーム（広島県産業奨励館）は全国ネットだが、すずの生まれ故郷である広島市の江波や呉市の三ツ蔵、下士官兵集会所、海軍病院前の階段等は地元の人々しか知らないはず。しかし、本作のスクリーン上でその姿を見れば、CGとは全然違う美しさと優しさに懐かしさを覚えるはずだ。

今や日本のアニメは世界に誇る技術だが、それがここまで進歩していることを本作を鑑賞してボンヤリとでも理解することができたのは大きな収穫だった。その一方で活躍している若者たちは、本作を鑑賞してさらに技術を深め、世界に飛躍してほしいものだ。

■□■あの戦争を、あくまで庶民の生活目線で！■□■

一言で「戦争映画」と言っても、それは戦争を讃美したり扇動する映画を意味するのではなく、反戦をアピールする映画も含んでいる。そういう意味で戦争映画の名作は多いが、とりわけ1960年代の「ベトナム戦争反対」の世論の広がりを受けて、アメリカではその後『プラトーン』（86年）等のベトナム戦争をテーマとした「反戦映画」の名作が数多く誕生した。

他方、野坂昭如の原作『アメリカひじき・火垂るの墓』（67年）を映画化した『火垂るの墓』（08年）（『シネマルーム20』280頁参照）はかなり強烈な反戦映画だったし、こうの史代の原作『夕嵐の街 桜の国』（04年）を映画化した『夕嵐の街 桜の国』（07年）（『シネマルーム15』261頁参照）も広島への原爆投下をテーマとした静かな反

戦映画だった。もちろん、黒木和雄監督の『TOMORROW／明日』（88年）（『シネマルーム11』163頁参照）、『美しい夏キリシマ』（02年）（『シネマルーム11』159頁参照）、『父と暮せば』（04年）（『シネマルーム4』288頁参照）の「戦争レクイエム3部作」もそうだ。

そのように考えれば本作も明らかに反戦映画だが、同時に本作は、あの戦争さえなければごく平凡な一生を送ったはずの、少しぼんやりした少女・すずが否が応でも戦争の時代を生き抜かなければならなくなった8歳から21歳までの成長物語ともいえる。そこには『風に吹かれて』を代表として「アメリカの輝かしい楽曲の伝統の中で新しい詩的表現を生み出してきたこと」によって、あっと驚くノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランのような明確な「反戦」のメッセージはない。つまり、本作はあくまで庶民の生活目線から「あの戦争」を見つめたものだが、その中でジワジワと感じられてくる反戦のメッセージは・・・？

■□■食事、衣服、仕事、空襲警報・・・■□■

人間の生活の基本は食事、睡眠、仕事だが、お偉方が勝手に始めた戦争の旗色が悪くなってくると、18歳で広島市の江波にある浦野家から呉市の北條家にお嫁入りしたすずの日常生活にも大きな変化が訪れてくることに。つまり、そこには「空襲警報」という邪魔物が入り込んできた他、食料不足をはじめ、ありとあらゆる物資が欠乏したため、その中で生活していくための工夫が不可欠になったわけだ。嫁ぎ先の夫である周作はすず以上に優しくかったし、義父・円太郎も義母・サンも優しくかったが、離縁して娘の晴美とともに北條家に戻ってきた周作の姉の径子は当時の「モガ」だったこともあり、何かとすず以上に厳しかったが、それくらいは波風はあってあたり前。そんな中、本作で丁寧に描かれる日常生活とそこに見るすずのさまざまな工夫は興味深い。

他方、当時は結婚する相手も知らないまま親の言うとおりの縁談に従うという風習もあったから、本作に見るすずの嫁入りのスタイルが異例というわけではない。しかし、どうもすずの「本命」は同級生で海軍の道に進んでいった水原哲だったらしい。したがって、子供の頃の2人の中は単に仲むつまじいという表現だけで済ますことができるが、巡洋艦「青葉」の水兵になった水原が「入湯上陸」の際に北條家を訪れてくると・・・？幼なじみの2人が何の遠慮もなく会話している姿を見て、夫の周作はそれまで自分の前では決して見せなかったすずの生の姿(?)にビックリ！そのため、いろいろと気を回し、さまざまな策を弄してみたが(?)さてその結末は・・・？

あえて言えば、このシークエンスに見る人間模様(夫婦関係)の機微、あるいは感情にまかせた発言や行動はあの時だけの稀有な「非日常」だったのだろう。本作は、人間が生活している以上必然的にたまに発生するそんな「非日常」も描きつつ(ちなみに、道に迷い遊郭で白木リンと出会うエピソードもそんな非日常の1つだ)、ほとんどはすずの日常生

活を淡々と描いていく。防空壕を作るのは基本的に男の仕事だが、空襲警報が激しくなるにつれて小さな晴美は「空襲警報はもう飽きた！」と叫んでいたが、ホントは大人たちもそう叫びたかったに違いない。しかし、それはもちろん我慢。そして食事も我慢、我慢の毎日が日常に・・・。

■□■これは「誰のせいでもない」と思うのだが・・・■□■

私は本作に続いて『誰のせいでもない』（15年）を鑑賞した。その映画は、作家トマスがある日起こした交通事故で一人の子供を死なせてしまったものの、それは「誰のせいでもない」という形で因果が巡っていく、ちょっと不思議な納得しづらい物語だった。それに比べれば、さすが晴美を連れて入院中の円太郎を見舞った帰り道で空襲に遭い、警報が解除された後、偶然時限爆弾の爆発のため右手に引いていた晴美を死亡させ、自分も右の手首から先を失ってしまったのは「誰のせいでもない」はず。それにもかかわらず一人娘を失った径子は、しばらくの間すずを責め続けたからこりやすずはかわいそうだ。

離縁した径子が北條家に居つくのなら、すずも呉市から広島市の江波の実家に戻ってもいいのでは・・・？そんな話し合いがまとまり、昭和20年8月6日の朝、すずが江波への帰り支度をしていると、その時・・・。そして、8月15日の敗戦へ。江波は大丈夫だったの？すずの両親は？また周作は？

■□■広島は？すずと周作の生きざまは？■□■

原爆が投下された直後の広島は惨状を描く映画は多い。しかし、静かな反戦映画である本作はその点についてもショッキングな映像は見せず、それにかわって（？）母親を失い孤児となった一人の少女の姿を描いていく。世の中には人並みの夫婦生活を営んでも子供に恵まれない夫婦があるが、どうも周作・すず夫妻もそうだったらいい。そんなこともあって広島で戦災孤児の少女に出会った周作・すず夫妻はこの少女を連れて家に戻ってきたが、さてこれからどうするの？本作が設定している周作の仕事は、海軍軍法会議録事（書記官）。妻のすずにも優しく接した周作は仕事も勤勉だったようで、終戦直後は機密文書の焼却作業等に忙しくしていたが、原爆被害を免れたのはラッキー。戦争が終われば当然ながら空襲警報がなくなり、夜中の灯火管制もなくなるうえ、配給生活の中にもヤミ物資が流通しているから生活は戦時中よりずっと楽。髪を切ったすずは子供に間違えられ、進駐軍のアメリカ兵からチョコレートを分けてもらえたほどだ。

しかし、他方ですずが失ったものは？その最大のものは右手。そのため少女時代から大好きだった絵が描けなくなったのが、すずにとって最もつらいことだった。しかし失ったのはそれだけ？つらいのはそれだけ？いやいや、決してそんなことはないはずだ。

しかして、本作ラストにはすずの心の叫びを否応なく聞くことになるが、それでも人間は生きていくもの。本作ラストが静かに訴えるそんなメッセージはお見事だ。それと同時

に、本作の『この世界の片隅に』というタイトルにも十分な納得感が・・・。

2016（平成28）年11月25日記